

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	あぢきなさ : 詩歌
Author(s)	葉二
Citation	龍南會雜誌, 152: 91-92
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6295
Right	

ちやるめらの部落行く匂ひ、
目籠の頼のかすく
手まさぐる若きかひなに
やるせなき柔毛の震慄。

さんたまりや、をどめは謠ふ
混血の舌の震音、
祖先を故國を想ふか
優雅に鬱憂に。

空かほる潮の遠鳴り、
瑠璃色の沖走る帆は
おらんだかはたほるとがる
見る目憂きざぼんの畑。

あゝざぼん、芳烈の香に
噎び泣く俚謠の色彩、
うち、震ふその唇に
はにかみの甘き接吻。

あ ぢ き な さ

——Xの君へ——

葉

二

暫らくの別れのきはに猶もわが云ひ得ぬ心あぢきなきかな
踏み越わし七重の山をかへり見て淡き誇に街に入りたる
幸ありと思ひし夢のさめしころ世にはなれたる心ちするかな
夜汽車待つ山の小さき停車場にわれをめぐりてこほろぎの鳴く
葉鶏頭薬園町の杉垣のあひより見えて秋晴るゝかな

われとよく争ふ妹我が居間にさうび持ち來ぬ秋立ちければ
うす黄なるほぶらそよげり秋立ちし病院うらの濱の夕日に

瘡 痕

永劫とこまほに癒わがたき胸の瘡痕よつとめはげみて唯なくさめむ
男の子われあゝこの度はこの夏はかならず人に勝たむとぞ思ふ

春 秋

ついでついでとんぼ

鏘 乎

月夜涼み場満ち潮サラと遠淺に
萎み葉に飛ばぬ蟬のあり遠雷す
早り野路を遠埃する管笠が
今日もく雨待ち宵を蚊食鳥
遠のき雷ひき水音冴に青嵐
醫師呼ぶと町へ夜人力車を稻妻す
火に識りし谷間の家もきりくす

よな、白き草を秋風山下りに
店に聞く琵琶など温泉宿秋たちて
霧裂けて放し飼牛の裾野廣口
乳母歸ると泣く子を蜻蛉秋晴れに
落ち釣瓶探朝る寒を姉病めり
大悟の朝雁來紅に月淡し
折詰もふらと濠沿ひ天の川
遠乗馬水かふ萩に魚影して
小春祭日障子張る日椽病後に